



“共生”実践の機縁として

村 永 行 善 (むらなが ぎょうぜん)

世のなか安穩なれ

親鸞聖人七百五十回大遠忌法要のスローガンは「世のなか^{だいおんき}安穩^{あんのん}なれ」であります。

まさに時代を直視しますとき、言わずにはおれない気持ちを宗祖のお言葉をいただいて名付けたと理解します。

得ることによる幸せはどこまで？

私たちは常に、健康を願いながら病^{やまい}に苦しみ、平和を求めながら争い、幸せを求めながら苦悩の中で、もがき苦しんできました。

先日 NHK のテレビでギリシャのアテネについての放送がありました。紀元前 5 世紀アテネの人口の 4 割が奴隷であり、アテネの維持は他国を侵略し、そこからの税がアテネを支えたと伝えました。戦争により得るものと失うもの、戦争とは人々の幸せに貢献しているのでしょうか。かつて世界中は第一次大戦から第二次大戦の中で言葉では言い表せない苦難の中に包まれました。世界を巻き込む大戦を二度も経験した世界の人々は平和問題に真剣に取り組みました。しかし第二次世界大戦後も朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラン・イラク戦争、湾岸戦争、そのほか世界各地において紛争があちらこちらで起こりました。そして今現在も起きています。戦争は相手を支配して自分に利益をもたらすものとしか言いようはありません。

日本の高度経済成長

1964 年に東京オリンピック実施がきまり、1970 年には日本万国博覧会が大阪千里丘陵で実施が決まると東海道新幹線、名神高速道路、大型施設の建設など活発に事業が行われ「もはや戦後ではない」と言われるようになり、日本は高度経済成長と呼ばれる時代に入っていました。

技術革新、企業改革などによる日本の経済成長は目を見張るものがありましたが、日本の企業家に対し世界の目はエコノミックアニマルと批判しました。私たちはこうした経済成長によりかつてない豊か

さを手にすることができましたが、石油コンビナートによって起こった四日市ぜんそく、水俣窒素会社

によって起こった水俣病、神通川下流域のイタイイタイ病などのことを忘れてはなりません。公害は

今やすでに地球そのものの存在を危^{あや}うくしています。

すでに地球温暖化の影響とみられる現象は世界各地で顕在化してきています。巨大なハリケーン、異

常気象の豪雨と四十度を超える猛暑、地球温暖化の問題は将来の問題ではなく、^{ただ}直ちに対応しなくてはならない問題となりました。北極海の氷の面積は過去最小を記録し、30年後に氷は溶けて白クマは絶滅するのではないかと。またヒマラヤやキリマンジャロの万年雪もすべて溶け、川は干上がり砂漠は広がり生き物の住める環境は激減するのではないかなど、諸警告が発せられています。地球は人間だけのものではありません。

ご門主さまは親鸞聖人七百五十回大遠忌についてのご消息で

仏教の説く縁起^{えんぎ}の道理が示すように、地球上のあらゆる生物非生物は密接に繋がりを持っています。

ところが今日では、人間中心の考えがいよいよ強まり、一部の人々の利益追求が極端なまでに拡大され、世界的な格差を生じ、人類のみならず、さまざまな生物の存続が危うくなっています。さらに急激な社会の変化で、一人ひとりのいのちの根本が揺らいでいるように思われます。

と述べておられます。今こそ私たちは仏教の視点、親鸞聖人のお心にたつ時であります。

縁起の道理に立って

私たちの宗門には、26の関係学園があります。これら学園は親鸞聖人のお心をいただき、建学の精神として教育研究に勤しみ今日に至っております。龍谷大学は2009（平成21）年に創立370周年を迎え

ます。また、第四次長期計画を進め、「共生^{ともいき}をめざすグローバル大学」を表明しています。「共生」とはどのようなことでしょうか。当時の上山大峻学長は

人間そしてすべてのいのちが民族、文化、宗教、違いを超えて、平等に、平和に、共にいきることのできる社会の実現が求められる。20世紀は、競争によって自己の能力を高め、自己の幸せを確保するという思考が支配的であった。しかし、そこに起きるもう一面は、他を排除し、他を征服するという争いと孤立である。その状況を方向転換させるもの、それは「私のいのちが他の命によって生かされており、また私が生きる意味は他のいのちを生かすことによって実現する」という「共生」の事実の認識と実践である。

と述べています。

むすび

私たちの教団は、先の七百回大遠忌法要で「かたちばかりの僧侶」、「名ばかりの門徒」の現実に気付き

「全員聞法^{もんぼう}」「全員伝道」のあるべき教団を目指し門信徒会運動を立ちあげ、併せて同朋運動を推進してまいりました。私たちはさらに親鸞聖人七百五十回大遠忌を機縁として基幹運動を推進していかねばなりません。その運動の機軸こそ「共生」の考え方であると思います。「世のなか安穏なれ」と願う我々は

弘誓^{ぐぜい}の仏智^{ぶつち}にたちその実践に努めなくてはなりません。

宗祖の大遠忌は宗門のいのちが問われる大事業でありますので、宗門人一丸となつて取り組んでいかねばならないと思うことでもあります。

（宗会議員）